

古い町並みの魅力を再発見

大阪市内で、今でも昔ながらの町並みを残している地域が注目を集めているが、中でも空堀はどこよりも早く注目された地域として知られている。

空堀地区とは、大阪市営地下鉄「谷町六丁目」駅を中心とする、東西約八〇〇メートル、南北六〇〇メートルほどの広さの区域を指す。上町台地の一部でもあることから、町全体が西に下っており、その高低差を利用した長屋が並び、いわゆる『立体的』な独特の構造をもっている。表通りともいうべき「空堀商店街」から一歩奥に入ると、細い路地が連続して続き、そこには大阪独特の長屋が軒を連ね、家の前に置かれた盆栽や鉢の縁が連続する先に、お地蔵さんが祀られる。そつした中に、さりげなくある老



上町台地にあるため、西に向かって下っている空堀を代表する「観音坂」。異なる幅の石段が2列あり、その横には自転車などの利用のための坂も設けられている

ストック再生の現場から

庶民の町の再生が 新しい都市を生み出す

空堀 界限

ナビゲーター

吉野 国夫

Kunio Yoshino



空堀の路地を歩いていると、通路も自分の庭のように手入れされているケースをよく見かける。これは材木屋のご主人が坪庭風に改装し、そこにさまざまな手作りアートを置いたもの。見るだけで、心が和やかになる

舗の食堂や、古い屋敷を利用した複合店舗など、個性的な店が点在している。

特に古い長屋を店や住まいに再生する動きは、ますます活発になっていくという。この空堀の魅力に四半世紀も前に気づき、当時、イラストマップまで作り上げたDAN計画研究所所長の吉野国夫氏は「空堀には、大阪人なら世代を問わず、誰でも懐かしいと感じる町並みが奇跡のように残っていて魅了されます。さらに、昔ながらの都市の下町的コミュニティが今でも成立していますから、新参者でも、すんなりと町の住民になれるのだと思います」と説明する。

だがそうした空堀にも時代の波は押し寄せ、所々空き地も見られるようになってきた。そこで、『こうした『近代大阪の原点』ともいべき魅力を残すため、大阪市では平野郷や住吉大社周辺で行っている市内における町並みや景観などの地域特性を生かすための「HOPEゾーン事業」(1)を、今度、空堀地区でも着手する予定だという。これにより、今残っている景観が、これから先も残されることが期待できる。そしてこの計画実施をきょうかけに、大阪における再開発が、既存の景観を生かした都市再生という、新しい形のものとして根付いていく契機になることが望まれる。

(文責・CEL編集室)

(1) 歴史的・文化的雰囲気を感じさせる町をもっと魅力的にするために、建物などの修景工事を行うもので、外観にかかる工事費用に大阪市から補助金が出る。

空堀で発見したコンバージョン物件



かつて医院だった建物をコンバージョンして、建築設計事務所として利用している物件。高い天井や待合所だった広いスペースなど、贅沢な空間構成になっているのは、昔の建物ならではの



かつてお漬物屋だった店舗を改装し、手作りのクラフトを販売する店にした中村肇さん(右)と今回のナビゲーター役の吉野国夫氏



路地のいたるところにお地藏さんがあるのも空堀の特徴。今でもきれいに手入れされており、コミュニティづくりの一助にもなっている



長屋の雰囲気を残しながらも、今風のお店へ見事に改装している事例も多い。そういう店は、扱っている商品も手作り品など個性的なものが多い



路地の奥にある普通の長屋が、よく見ると和紙の店だったりするの空堀ならではの魅力。こうした「簡易なコンバージョン」ともいべき長屋利用は、空堀全体ではかなりの数になる



樹齢650年の延珠えんしゆが目を引く「榎木大明神」。階段の上には、この近所で生まれた直木賞で有名な小説家の直木三十五の記念碑もある。ここはかつて、熊野街道が大きく折れる場所でもあった。それを記した石碑も残っている

吉野 国夫(よしの・くにお)

DAN計画研究所所長。1949年大阪生まれ。73年アート・デザイン専門家集団「ダン・アソシエイツ」を創立。翌年(株)DAN計画研究所に改組、代表取締役就任。以来、「アート、食文化、旅、リゾート、長屋文化、上町台地等」にこだわり、今日に至る。